

公立小学校における「総合的な学習の時間」が目指すもの —自己表現力の育成—

川口 康子

Yasuko KAWAGUCHI: The Purpose of the 'Period of Integrated Study' at Public Elementary Schools
—Developing an Ability for Self-expression—

文部科学省は、公立小学校で実践されている英語活動を国際理解教育の一環と位置付けている。しかしながら小学校での取り組みの実態をみると、教科としての英語に相当する内容が多いことが指摘され、このような英語活動に対して賛否両論がある。そこで鳥取県下の公立小学校の実践例をもとにしてその内容と方法を分析し、改めて総合的な学習の時間に取り組むべき授業のねらいとあり方について検討を行い、英語の位置づけを提案する。

キーワード：総合的な学習の時間、国際理解、英語活動、コミュニケーション能力、自己表現力

はじめに

現在、公立小学校で英語活動を導入している小学校はかなりの数にのぼっている。その授業時間数や取り扱う内容は様々ではないが、総じてみると、何らかの形で英語を導入することについては賛成する意見が多く見受けられる。

しかしながら新学習指導要領で示された国際理解教育の一環としての英語活動とは何か、英語教育と英語活動の違いは何か、他の外国語ではなぜ英語なのか、等々が明確になっていないという指摘や、国際理解教育は英語を学ぶことではない、国際理解教育の一環としての英語活動とうたいながらも実際は国際理解に関連する内容ではなく教科としての英語を教えている、といった問題点が指摘されている。また、早期導入そのものを危惧し反対意見(大津・鳥飼 2002)も出ている。

一方、公立小学校の教職員の中には、導入当初から戸惑いを隠さない人もいた。まず英語が分からな

いという不安、あるいは英語に対して強い苦手意識を持つもの、指導法が分からない、研修を受ける機会が少ない等、英語活動は担当する学級担任にかなりの負担感を与えている場合がある。

果たして総合的な学習の時間において、英語はどのように位置付けるのがよいであろうか。本稿においては、鳥取県下の公立小学校で行われている授業を参考にして、現在かかえている諸問題を整理し、「総合的な学習の時間」のねらいを検討し、英語学習を含む総合学習の在り方について一試案を提示したい。

1. 鳥取県下の小学校英語活動の事例

(1) 小学校英語の導入

新小学校学習指導要領は1998(平成10)年に公布され、2002(平成14)年に施行された。これを受けて鳥取県下においては、文部省より研究開発学校に指定された鹿野町立小鷲河小学校(当時)のほかに、学校独自の判断により英会話学習の導入を進める小

学校や、市の指定を受けて研究開発を行う小学校等、実施の内容、方法、時間数、担当者など、それぞれの学校の実情に合わせて、何らかの形で英語を導入する小学校が増加していった。なお英語を導入する場合の呼称は、未だ定まっていないため、本稿においては、小学校の実情に応じて英会話学習、英語活動、総合的に小学校英語（または英語）と呼ぶことにする。

筆者は、2000（平成12）年に境港市教育委員会より3年間の指定を受けて研究を行った渡小学校、同じく2000（平成12）年より英会話学習に取り組んだ智頭町立山郷小学校、鳥取市立末常小学校、そして鳥取市立遷喬小学校を訪問する機会を得た。このうち遷喬小学校と山郷小学校は2001（平成13）年にそれぞれ鳥取市、八頭郡の教育研究大会でコミュニケーション能力の育成、表現力の育成をテーマに研究発表を行っている。

総合的な学習の時間において、国際理解教育の一環としての外国語会話に取り組むこれらの小学校では、教科としての英語ではなく、外国語を使って様々な活動ができる楽しさを体感させることが重視され、学校教育に新たな風を起こそうとする熱意があふれている。筆者は、英語活動、あるいは英会話学習の導入のための授業研究を行うことが、小学校教育課程全体を見直し、改善する糸口になると期待した。

中央教育審議会答申の「第2部 第1章 これからの学校教育の在り方」のなかで、国際化に対応する教育の留意点が次のようにあげられている。

- (1) 広い視野を持ち、異文化を理解するとともにこれを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
- (2) 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- (3) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現

力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

このうち最後にふれられている外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を目的として、各小学校は英会話学習、または英語活動を導入したと判断できる。

試行錯誤の英語導入ではあったが、これらの小学校に共通していることは、音声を中心にして英語を導入していることであり、それについてはその効果が認められる。しかし英語を不得手とする学級担任が音声中心の英語教育を担当する場合の問題点や、英語活動の目標は何なのか、コミュニケーション能力は果たしてついているのか、等々、検討課題もまた判明してきた。そこで、まず上述3小学校の研究発表時の学習指導案をもとに、授業内容と方法の検討を行うこととする。

(2) 授業内容の特徴

境港市立渡小学校における研究指定（2000年）、鳥取市立遷喬小学校と智頭町立山郷小学校の教育研究大会における発表（2001年）は、いずれも2002（平成14）年度に新学習指導要領が正式に実施される以前のものである。各小学校とも1998（平成10）年12月に公布された新学習指導要領に基づき、総合的な学習の時間の中で扱うことが可能な英会話学習、あるいは英語活動の導入に対して、いち早く積極的な取り組み姿勢を示したと言える。なお遷喬小学校においては2001（平成12）年度の研究発表後、2002、2003年度は英語活動の実施を見合わせ、2004年度に再開している。英語活動が行われなかった背景には、総合的な学習の時間に扱う題材が、国際理解教育の一環としての外国語会話のほかに、環境、福祉、健康、情報などがあり、学校判断によって別のテーマが取り上げられたことがある。

これら3小学校での英語活動・英会話学習の事例から、次のような特徴や共通点をあげることができる。

1) 研究主題・題材

各小学校の研究主題は次の通りである。

- ① 渡小学校：豊かな表現力・コミュニケーション能力を目指して
- ② 遷喬小学校：共に生きよう 地球人 ～コミュニケーション能力の育成をめざして～
- ③ 山郷小学校：国際社会に生きる表現力の育成 ～楽しく学ぶ英会話学習を通して～

また題材について、各小学校では次のように取り上げている。

① 渡小学校

○教科等：英語活動（全学年）

○単元名：人形劇をしよう／動いて遊ぼう／自分のことを知らせよう／あなたは～が好きですか／家族の紹介をしよう／ミス ソフィーと仲良くなろう大作戦

② 遷喬小学校

○教科等：ふれあいワールド（1～2年）・ときめきワールド（3～6年）（ふれあいワールドは英会話中心、ときめきワールドはふれあいワールドの発展として国際理解教育を含む）

○単元名：ふれあいワールド これは何？ 白い犬です。／ときめきワールド 日本っていいな アメリカもいいな／ときめきワールド 外国の方に日本のよさを紹介しよう

③ 山郷小学校

○教科等：英会話学習（全学年）

○単元名：すきなくだもの（Favorite Fruit）／動物（Animals）／食べ物と飲み物（Foods & Drinks）

これらの研究主題および題材のキーワードは、次の3点にまとめることができる。

1. 国際社会・国際理解
2. コミュニケーション能力・表現力の育成
3. 英語

これら3つの要素は、いずれも2001（平成13）年に発行された『小学校英語活動実践の手引』（以下

『手引』と略）において示されているものである。

『手引』の中で「総合的な学習の時間」においては、取り上げる題材の一つに国際理解の重要性があげられ、外国語によるコミュニケーション能力の育成が大切であること、そして子どもの負担を考慮して、言語としては英語を取り上げるとしている。各小学校の研究主題および題材は、学習指導要領および『手引』に即して取り上げられていることが分かる。

2) 言語材料・表現等

各小学校の年間計画をみると、取り扱われる英語の語彙と構文はおよそ次のようになる。

1. 語彙は子どもにとって日常的になじみがあり、興味関心をもつものを用いる。

色、数、動物、食べ物（果物、野菜、他）、飲み物、スポーツ、教室にあるもの、乗り物、月日、曜日、時刻、身体の部分、家族、天気、など。

2. 言語材料を導入する際、動作をともなうゲーム、ごっこ遊びなどを効果的に活用し、楽しく学習する。

3. 構文は、簡単な挨拶、自己紹介、日付・曜日の聞き方と答え方、好きですか、できますか、これは何ですか、などの限定された質問とその答えにとどめる。

3) 授業の進め方

3小学校の研究発表時の指導案（各小学校より各1事例のみ記載）は次のとおりである。

① 渡小学校（4年 全8時間）

○本時の目標：くだもの名前を英語で言うことができる。

“Do you like ~ ?” の質問に “Yes, I do./ No, I don't.” で答える。

○本時の展開

- 1 はじまりのあいさつ、体調を聞く。
- 2 歌 Good Morning
- 3 果物の名前 apple, grapes, peach, cherry, banana, orange, strawberry, pear, ほか

4 Do you like a banana? Yes, I do. No, I don't.

5 Yes. No. ゲーム ワークシートを使って友達に質問.

6 「運命の人をさがせ」ゲーム 同じくだものカードを持っている人をさがす.

7 おわりのあいさつ.

② 遷喬小学校 (3・4年 全24時間, ときめきワールド8時間)

○本時の目標: グループごとに聞き手に分かりやすいように簡単な英語を交えながら, 正月の様子を紹介することができる.

アメリカのChristmasを知り, 日本のクリスマスとの違いに気づくことができる.

○本時の展開

1 はじめのあいさつ.

2 日本のお正月について調べたことをグループごとに劇化して発表する.

3 アメリカのChristmasについてGuestの話聞く.

4 本時の学習を振り返り, カードに記入する.

5 おわりのあいさつ.

③ 山郷小学校 (5・6年 全50時間)

○本時の目標: 先生や友達の英語をよく聞くとともに, 元気な声で発音しながら積極的に英会話に親しむことができる.

ファーストフードショップで注文する言い方を知り, 英会話を楽しむことができる.

○本時の展開

1 はじめのあいさつ, 今月の歌 "Bingo".

2 復習: 食べ物, 飲み物の名前.

3 スピークアンドバトルゲーム Speak and Battle (カードを発音して進み相手に出会ったらRock, paper, scissors).

4 ファーストフードショップで店員とお客に分かれてやり取りを楽しむ.

Hello. May I help you?

Hello. Yes, one pizza and two juices.

OK. For here or to go? For here.

OK. ~ dollar (s). (pay money)

Here you are. Thank you.

Have a nice day. Thanks.

5 Guestにチップについての話を聞く.

6 本時の感想, おわりのあいさつ.

以上の内容と各小学校の年間計画をもとに, 小学校における英会話学習・英語活動の授業の進め方をまとめると, およそ次のように言うことができる.

〈英会話学習・英語活動〉

1. 授業の始まりに挨拶を行う. 小学校で行われる健康観察を応用した受け答えを含む.

例: Hello. How are you? の問いかけに対し I'm fine. I'm happy. (sick, sad, hungry, so-so, etc.)

2. 歌を歌う. 単語の数が少なく, 文章が短く, 繰り返しの多いものを用いる.

3. 復習を行い, 聴き取りの時間を十分に持つ.

4. 新しい単語, 構文を提示し練習する.

5. ゲームを用いて単語や構文等を繰り返す.

6. 会話などのコミュニケーション活動を行う.

7. 授業の感想を発表したり, 振り返りカードに自分の考えを記入する.

8. おわりの挨拶.

〈国際理解教育を含む英会話学習〉

1. はじめの挨拶.

2. 日本の文化・行事等を紹介する.

3. ゲスト出身国の文化・行事等の話を聞く.

4. 英語の歌を歌う.

5. ゲストと一緒にゲームやコミュニケーション活動を楽しむ.

6. 授業を振り返り, 感想を言う.

7. おわりの挨拶

これらの授業内容は他校の事例とも共通点があり, 現在実施されている国際理解教育の一環としての外国語会話 (英語) の授業の流れの特徴を示していると言える.

4) 授業の特長

上述の授業内容や進め方を見ると、現在行われている英語活動・英会話学習の特長は、次のようにまとめることができる。

1. 「聞く・話す」の活動を中心にして授業を進め、英語の音声を聞くこと・話すことに慣れる。
2. 児童の生活に身近な題材を扱っている。
3. 外国人講師やゲストとの交流を通して体験的に学習し、国際理解を深める。
4. 児童の学習負担を増やさないことに留意し、児童が楽しいと実感できる英語活動や交流活動を行う。

ということであり、『手引』で示された留意点とも合致している。

(3) 検討課題

学習指導案だけでなく、実際の授業の観察を通してさらに授業の進め方を検討すると、いくつかの課題が見えてくる。それらは、一つには英語教育という視点で検討すべきことと、もう一つには総合的な学習の時間で何をめざすかという視点で検討すべき課題であると考えられる。ここではまず英語教育としての視点で、上記授業内容の検討課題をあげることとする。

1) 正しい英語の知識が必要であること

はじめのあいさつにいわゆる健康観察に相当する内容が取り入れられ、“Hello. How are you?” “I’m happy.” “How are you?” “I’m hungry.”等の対話を行っている。“How are you?” “I’m fine.”は挨拶表現としての一つの慣用であり、不自然な英語表現を見直す必要がある。

またALT講師への呼びかけに“Miss Mary”あるいは“Mary sensei”等の表現が用いられるケースがある。しかし英語の一般的知識を学ぶために、Mary Jones先生の場合は“Ms. Jones”と呼ぶことが大切である。

人に何かを依頼する場合は“Please”および

“Thank you”. と言うことの大切さを教えるべきであるが、必要な箇所にこれらの言葉が聞かれないケースがある。

以上は英語を教える際には、英語あるいは英語圏文化の正しい知識が必要だという事例である。英語の発音や文法知識も含め、英語を教える際に間違った知識を与えないという意味で重要である(大津 2002)。

2) 楽しい英語はゲームを行うことではないこと

小学校において、必ずといってよいほどゲームが活用される。しかしゲームを行う際に、英語をほとんど用いないで、日本語だけの活動になっている場合がある。英語を楽しく学ぶためという目的でゲームという手法が用いられ、授業担当者の巧みな進行によっては効果的であるが、ALTとのチームティーチングの際も、本時の学習目標となる限定された単語以外、ほとんど英語が話されない場合がある。ゲームを行う際には、十分に英語の音声に浸ることでリスニングへの効果を期待する。単にゲームを楽しむ時間となっていることは改善しなくてはならない。

3) ごっこ遊びやゲームは真のコミュニケーション活動ではないこと

レストランごっこ、買い物ごっこ、インタビューゲーム等は、英語活動で頻繁に用いられている手法の一つである。これらの活動には、学習した構文やイラスト入りのワークシートが使用される。これらは英文の暗記とその再現という練習に相当し、相手の意見を聞くとともに自らの考えを発信するコミュニケーション活動とは言えない。

4) パターン化した教育方法は、自ら発信する力の育成に繋がらないこと

上記の「ごっこ」遊びは、パターン化した演習と捉えることも可能であるが、そのほかに次のような問題点が考えられる。

・ Review⇒Oral presentation of the new material⇒Practices (Games & Activities) とい

う授業の流れは、中学校英語教育にほぼ同じと言える。

・授業の振り返りとして感想を言う際に、児童は類似した表現の繰り返しを行い、あまり創造性が見られず、パターン化している。

これらの検討課題の大部分は、英語活動が英語教育としての内容を多く取り入れていることによるものと考えられる。よってこれらの課題を解決するためには、『小学校英語活動の手引』が示す英語活動のねらいと活動の在り方を確認し、さらに新学習指導要領で示された「総合的な学習の時間」導入の目的を改めて確認する必要がある。

2. 「総合的な学習の時間」のねらいと在り方

(1) 「総合的な学習の時間」における外国語会話の取り扱い

1998（平成10）年に公布された小学校学習指導要領「総則」において、外国語の取り扱いに関する配慮事項として、次のことが示されている。

『国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。』

さらに2001（平成13）年には、『小学校英語活動実践の手引』が発行された。この『手引』の中で文部科学省は小学校の「総合的な学習の時間」で導入する英会話等を「英語活動」と呼ぶとし、「英語活動」のねらいと活動の在り方を示した。その中で、特に次の事項（pp 2-4より抜粋）を取り上げて議論を行いたい。

1) 「国際理解」のねらい

国際理解は異文化を知ることだけにとどまらず、異文化を知ることを通して自国の文化を知り、さらに単に知識の習得だけを目的とするのではなく、行動する能力を習得することがねらいと

されている。（中略）さらに、外国語によるコミュニケーション能力の育成が求められている。

2) 「国際理解」の構成

国際理解を進める具体的な学習活動として「外国語会話」「国際交流活動」及び「調べ学習」などがある。

3) 「外国語会話」と「英会話学習」

子どもの発達段階に応じて、歌、ゲーム、クイズ、ごっこ遊びなどを通して、身近な、そして、簡単な英語を聞いたり話したりする体験的な活動を中心に授業が構成されることから、この手引では、「総合的な学習の時間」で扱う英会話を「英語活動」と呼ぶこととした。

4) 「英語活動」のねらいと活動の在り方—(3)

音声を中心とした活動を行う

英語の音声だけで十分にコミュニケーションを図ることができると言える。さらに、音声による言葉だけでなく身振り手振りや表情などによっても、意思を伝達できるものである。

上記の内容から以下のことを読み取ることが可能である。

1. 国際理解の一環として「英会話」を行う場合として、そのねらいや内容、方法等が提示されているが、「英会話」に限定するとは書かれていない。よって国際理解の一環として行う内容は「英会話」以外のものも可能である。（下線は筆者による。）

2. 国際理解は異文化を知ることだけではなく、行動する能力を習得することがねらいであると示されている。しかし行動する能力を育成するための具体的な方法が「外国語会話」以外に明確にされていない。

3. コミュニケーションについて、英語の音声だけでも十分であるが、身振り手振りや表情などによっても、意思を伝達できると説明されている。しかしそのほかには、コミュニケーション能力育成のための方法が明示されていない。

4. 国際理解を進める学習活動として「外国語会

話」「国際交流活動」及び「調べ学習」などがあると表現されている。したがってこの3つの方法に限定されるものではなく、他の学習活動を導入することはあり得ると読み取れる。

『手引』では、あらゆる有効な方法により、多岐にわたる内容を総合的に有機的な関連を持たせて学習することを推奨している。そこで、小学校学習指導要領および小学校英語活動実践の手引で示されたものを踏まえ、現在現場でかかえる課題を解決するとともに、より良い総合的な学習を実施するにはどのようにすべきなのか、さらに検討を進めていきたい。

(2) 「総合的な学習の時間」で取り組むこと

1) 気付くということ

小学校学習指導要領「総則」において、そのねらいを「(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。」としている。そして「例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。」と示している。

そこで総合的な学習の特長を生かして、国際理解、情報、環境、福祉・健康など多面的な内容を総合的に学ぶため、小学校においては、まず次のことに気付かせたい。

1. 自分と異なる人への気付き、そして自己への気付き

児童の回りにいるすべての人を尊重するとともに、自己を肯定する意識を育てる(直山2004)ため、家族、友人、地域社会の人、外国の人、異年齢の人(例：乳幼児・小学生・学生・成人・老人など)、健常者、障害を持つ人、男女、健康な人、病気の人

などの存在に気付かせる。

2. コミュニケーション手段への気付き

コミュニケーションの手段としてはまず言葉の存在を思いつくが、それには書き言葉(文字)、話し言葉(音声)、日本語、外国語などがあることに気付くことは大切である。またコミュニケーション手段は音声と文字だけではなく、手話、点字、絵画、身体の動き(ジェスチャー)、映像、などがあること、そして伝達に用いる機器としてコンピュータの重要性が増していることに気付かせる。

3. 異文化・外国語への気付き、そして自文化・日本語への気付き、共通することへの気付き

日常生活の中で外国語と触れ合う機会、外国の人々と触れ合う機会が少ないため、学校で異文化に触れる機会を持ち得ることは大切である。また日本語と異なる言語の存在に気付き、外国語と日本語を対比する機会を持つことも言語学習の上で重要である。外国語へ触れる機会を持つことは、日本語に気付く機会となるであろう。また英語の学習は、英語圏の人々と交流するためだけではなく、アジアやアフリカ等の人々との交流の際に、共通に使用する機会があることを認識するのは大切である。

低学年ほど音声言語に柔軟な取り組みができることはよく知られるところとなったが、様々な言語を耳にする機会を持つとともに、英語の音声に慣れることを目的として、英語活動を行う。したがって小学校における英語の導入は、音声中心に行い、日本語と英語の音やストレスの違いに気付くことを目的として行う。英語科としての教育は中学校より開始する。小学校英語活動が盛んに実施されるようになると、小学校で英語に触れていない児童との差異を心配し、すべての小学校で英語教育を始めてはどうかという声を聞くようになった。しかしながら小学校においては、英語科教育としての英語導入は行わず、コミュニケーションのための基本姿勢を学ぶことを重視すべきであろう。

また異文化理解という言葉を用いるとき、異なるということに重点を置く傾向があるが、人として共

通点があることを、同時に認識することは大切である。

2) コミュニケーション能力の育成

中学校英語教育の目標として、英語によるコミュニケーション能力の育成があげられる。しかしながら何年間学習しても、日本人は英会話ができないとよく言われてきた。そのため小学校で英語活動が開始されると、英語によるコミュニケーション能力育成への期待が高まったわけである。たしかに低年齢の児童ほどに英語のリスニング力への効果があることを耳にするが、早期に導入した場合、英語を用いてのコミュニケーション能力育成に効果的であるという声は聞かれない。コミュニケーション能力育成のために今小学校で取り組むべきことは、早期に英語教育を始めることではなく、コミュニケーション能力育成のための基礎づくりであろう。

では、コミュニケーション能力とは何か。それは話すべき内容(知識)を持ち、話し方の技術を持ち、相手と積極的にかかわろうという姿勢を持つことであると考える。よってコミュニケーション能力の育成に必要な要素としては、内容(知識)、話し方(技術)、積極的な態度の3点の育成と考える。日本の教育は知識習得型の傾向が強かったが、これに加えて技術を伸張すること、および交流の精神の育成を図ることが大切である。

1. 話すべき内容(知識)

どのような教科を学習する時も、それが受身的に聞いて覚えておく事柄という意識ではなく、能動的に相手に話す内容になることを意識する。異文化、様々な国の礼儀、外国の学校教育を知るなど、相手を知ると同時に、自分自身のこと、自分の国、自分を取り巻く文化等を認識することは大切である。

2. 伝達の仕方(技術)

日本語による聞く、話す、読む、書く技能の伸張を図る。国語の学習をコミュニケーション手段としての日本語という視点で学ぶことにより、言語を意識し、言語を使用する能力の育成を図ることが大切である。

これまで大人になってもコミュニケーションを苦手とする人のことはよく耳にしてきた。小学校教育課程であまり論じられていなかった論理的に話すことの重要性を認識する(福澤2004)ことは大切であり、総合的な学習の時間のねらいを考えると、今こそ論理的思考の育成を検討すべきであろう。コミュニケーション能力の育成を目指して、児童へ質問する際には、それに対して必ず論理的に返答することを求め、それを繰り返し練習する(三森2004)など、新たな学習方法の導入を検討する機会でもある。

3. 積極的な態度の育成

相手を知ろうとする心、相手に自分を伝えようとする心を育成することは、大切である。このことは、国際交流の場だけではなく、日常の家族や友人等とのふれあいの際も大切である。近年、小学生の交友関係が問題視されるケースが増えている。そうした観点からも、積極的に相手を思いやり、言葉を交わす姿勢を学ばせたい。

3. ま と め

筆者は、本学附属幼稚園での英語遊び導入にかかわり、子どもたちの英語習得の早さに目を見張った。外国人講師とのチームティーチングにより、外国人に接する際の積極的な態度、異文化への柔軟性など、英語指導者のかかわり方によっては、英語の早期導入の成果が大きいことを疑わなかった。小学校において英語活動が導入され始め、いわゆる先進校での成果もまた同様に肯定的に見てきた。

しかしながらここ数年の小学校の現状を見ると、必ずしも成果ばかりを追うことができなくなっている。ところがさらに、英語活動ではなく、小学校に教科としての「英語」を導入することが検討されているという。小学校での英語の導入を含めて「総合的な学習の時間」の意義は何かを改めて考えるに至った。

日本の学校教育の弱点は、批判的に文章を読む力を育成していないこと、考えたことを論理的に表現

する力を育成していないこと等があげられる。それらを考えると、「総合的な学習の時間」にこそ、弱点を克服し、必要な批判力・表現力を育成すべきではなかろうかと考える。英語活動を行わないといっているのではない。英語活動を取り入れることの結果は認めるが、論理的な思考の育成を同時に行わなければ、結局はコミュニケーション能力育成の土台が確かなものにならないと言うことである。

また「総合的な学習の時間」の特色は、国際理解、情報、環境、福祉・健康等を分野別に学ぶことではなく、それらを総合的に学ぶことにより、より大きな力の育成が可能になると考える。よって、英語活動を独立させて考えるのではなく、他の教科や学校裁量で取り入れる様々な内容を総合して、小学校における新たな学習内容と方法を構築し、教育内容と方法の意義ある転換を目指したいと考える。こうして考えをまとめてみると、中央教育審議会答申の国際化に対応する教育を進める上での留意点に立ち返ることとなる。ただし中教審答申と異なる点は、小学校教育課程においては、外国語能力の基礎の育成を図ることまでは行わないということである。

おわりに

現在英語をめぐる議論は、ますます盛んになって

いる。小学校課程の教科として英語を導入すべきであるという主張と、反対という意見の対立点が明白になってきている。

本稿における議論をもとに、さらに研究を発展させ、小学校への英語導入をより意義のあるものとするための具体的授業内容と方法の検討をさらに進めたいと考える。

参考文献

- 大津由紀雄・鳥飼玖美子『小学校でなぜ英語？—小学校学校英語教育を考える』、岩波ブックレット、2002
- 大津由紀雄（編）『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会、2004
- 直山木綿子『小学校への英語導入について』「小学校での英語教育は必要か」、2004
- 三森ゆりか『母語での言語技術教育が英語の基礎となる』「小学校での英語教育は必要か」、2004
- 福澤一吉『公立小学校に英語教育を導入する前に—思考の論理表現教育のすすめ』「小学校での英語教育は必要か」、2004
- 文部省『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局、1998
- 文部科学省『小学校英語活動実践の手引』開隆堂出版、2001